

フランスの冬は午後の四時を過ぎると暗くなる。

私の家から北に五六分歩いたところに、革命時代に破壊され、正面がのっぺらぼうのモンチエヌフ・聖ヨハネ教会という巨大な教会があった。前半分がないのにあの大きさであるから、破壊以前はおそらくこの町にある大小二十ぐらいある教会のなかで最大級のものだったに違いない。この古い町には様々な歴史のつめあとがある。町の中心には十二世紀の中頃、アリエノール・ダキテーヌがアンリ・プランタジュネ（すぐイギリス王となる）と結婚したノートルダム大教会があるが、正面に彫られた聖者の東部はすべて削りとられていた。宗教戦争時代のプロテスタントの仕業である。宗教も革命も破壊の道を通る。

この町にはジャンヌ・ダルクの神学査問委員会にさかのぼり、ラブレー、デカルト、カルヴァンも一時籍を置いたという古い大学があり、その建物の中にはミッテランがバカロレアを受けたという小部屋もあった。その後八十年代になって再訪したときは、大学の古文書からなんとデカルトの修業証がでてきたと話題になっていた。古い大学の建物もそうだが、この町ではなんでもなような街角に二千年をこえる歴史が堆積されている。モンチエヌフの残った後陣は、この町の風景のなかで最も美しいもののひとつだが、半分破壊されたこの美しい教会の近くにシネ・ユと呼ばれる大学映画館があった。

六十七年の秋、ある日本人を迎えにパリに出た私は、同じモスクワからの飛行機で到着した N さんという、まだ二十歳前の少年に会った。東京の高校をでてパリの映画学校に入るために来たのだという。フランス語がまったくできず、カフェでの注文もトイレを尋ねる言葉も知らなかったが精悍な顔をしていた。私が映画というものを知的実体として意識したのは、この無知で勇敢な少年を見てからである。人は一目で感化されることがある。

しかし想像力に乏しい私は暗室で映像を眺めるより、この町では外で実際の建物や人間を見るほうがずっと面白かったので、こうした映画館にそれほど通

ったわけではない。むしろ町そのものが、自分自身そのなかである役を割りふられた巨大なシネマのように私には思え、わざわざ暗い部屋のなかで自分が排除されている虚構（そうでないことはあとで気づくのだが）を見に行こうとは思わなかったというのが正確かもしれない。さらにシネ・ユはべらぼうに安かったこともあってなんだかありがたみがなかった。よさそうな映画は心地よい椅子にすわり高い金を払って見たいという見栄（だろうか？）が私にはある。

私の生まれ育った秋田の鉾山町には、鉾山勤めの人たちの娯楽用に造られた康楽館という名の大きな歌舞伎小屋（ござに座って見る）があり、芝居のない日の土日は古い映画をやっていたのでよく通ったが、花園館という、椅子席（といっても背もたれ付きのベンチ）のある、比較的新しい映画を週日にやる方にも、お金のやり繰りをつけて見にいった。フランスという国が私にとって特権的な位置を占めるようになったのは、小学校の頃、そこで「白い馬」という映画を見てからである。南仏カマルグ地方の野生馬と少年の交流を描いたこの映画を、三十数年後にビデオで見た時も涙が止まらなかったが、私がフランスに見ようとし、そしていまも見つづけている夢は、当時は不可解なフランス語のナレーションの響きに支えられたこの「白い馬」の映像の延長であることに今ふと気づく。

さて六十八年が明けても夜は短くはならず、また学生増、教師不足、予算不足による二年目での試験不合格者が増え、学生全体にあせりの様相が見えてきていたが五月革命はまだだった。そうしたある日、「ハラキリ」という、学生の苛立った心に呼応するようなどぎつい題名の日本映画が、大学のアンフィと呼ばれる講堂のような教室で上映されるというビラ広告が町の方々に貼られた。私が日本の大学をでたころできたこの映画は見たことはなかったが、太平の世が続き、切腹という制度の実体が失われてきたころ、切腹する刀もないのに武家屋敷の庭で切腹すると称して、その武家から迷惑金をせしめようとした若者が、差していた竹光で実際に切腹しなければならなくなるというような話であることは知っていた。しかしシネ・ユにもあまり行かなかった私が、この、教室の延長のような大学の講堂での日本映画の上映会になぜ行ったのか、いまではよく思い出せない。

『法の精神』のなかでモンテスキューはほんの少しだが、当時（江戸時代）の日本の法制度について述べている。日本は極端な罰則体系によって法のバランスが失われている、というのだ。この映画のテーマも、実社会から切り離されたこうした伝聞知見によって裁断されるのではないかと、いい加減うんざりしたはずである。しかしこの町で二年目の冬を迎えていた私には、日本についてふつうのフランス人が持つような一種のエキゾティズムが芽生えてきていたのかも知れない。大学講堂での映写会は、上演後はほとんど常にディスカッションがその場で行われるのだったが、それがうとましくもあり、反面、日本人が議論に加わらなかつたら見に来た人はがっかりするだろう、という思いもあった。

フランスでは喋るべきときに喋らないものはバカだとみなされる。無言の意を汲むということは、よほどの親しい仲でも、皆無とは言わないが滅多にない。当時、日本語もろくに使えなかつた私がフランス語ではまがりなりにも自分を主張できるようになったのは、こうした風土に否応なく投げ込まれたからである。その後、帰国してから頭の中で事前に作文せずに日本語をどうやらしゃべれるようになったのも、こうした経験のおかげだ。

日本の「標準語」がほとんど外国語に等しいような地方出身の人が英語やフランス語と限らず、外国語で自分を表現できるようになると、なぜかもう一つの外国語である日本語もコンプレックスなく使えるようになる。しかし日本人であるから当然「国語」である日本語を所有していると思込んでいる人、大多数に共通の言語で自己を十分表現できる言語的体制派人間は、自己表現のためにもう一つの言語を学ぶという動機は強くない。したがって外国語の上達が遅く不十分であり、結局違う言語の価値観をもつ人間の立場になって考えることがおっくうになる。すべて日本語に翻訳し、日本「標準語」だけでものごとを表現したがる日本人は、どこでも英語の論理を通そうとする一部のアメリカ人に似ている。

「ハラキリ」を見にいったのは、この機会に何か言うことを期待された「日本人」としての私が、フランスの学生に自分たちの閉塞感をこうした外国作品のテーマを批判することで誤摩化してはならないと言おうとしたからだ、といったら事後の後知恵と言われるだろう。実際は単に、バカとも、フランス語ができないからとも思われなくなかつたのだ。

映画は最初、ある初老の浪人が立派な武家屋敷に、庭で切腹させてくれと訪

ねてくるところからはじまる。また金目当てに来たと思った家老は、以前やはりこの家に切腹させてくれと頼みにきた若者の顛末を語って翻意をうながす。この若者は期待に反し、竹光による切腹を強制され、長い酷い苦しみのあと介錯されたのであった。記号化されたような制度にも苛酷な実体がまだあるのだと。しかしこの初老の浪人は金目当てではなく、酷い死に方をした娘婿の復讐にやってきたのだ。仲代達矢が浪人、家老は三国連太郎であった。

貧しさから自分の刀はとうの昔に売り払っていたのだが、切腹のときに真剣を使えず竹光を用いねばならない、ということはある得ないことではないかもしれないが、きわめて異常な状況である。しかしフランスの学生は竹光切腹（音楽は竹満徹だった）という形態を当然の前提ととり、後半の復讐がカタルシスになったようだ。彼らはこうした切腹が当時の日本武士のふつうの習慣であるとしたのだ。各々の立場の者が、多くは死という形で面目をほどこすこの映画は、二度とみたくなくなるほど重苦しいものであった。

空洞化したかに見える切腹制度を利用しようとしても、それを逆手にとる体制から逃れることはできず、異議申し立てが不可能な状況でそれを被るしかないということであり、この非人間性を回復する唯一の方法は私法（仇討ち）の論理だけだということのように私には思えたが、これを彼らは現在まで続く日本の非西欧的な習慣のひとつなのだ、と片づけた。この映画は五月革命前のざらつく彼らを激しく反発させたのである。

映画の解釈はさまざまあっていい。しかしこうした理解の構造はモンテスキュー時代から本質的には変わっていない。当時の破綻のない論理と法の体制とがもつ非人間性を、私法であがなう話はフランスとかぎりずどこにでもある。彼らはこれを前世紀の異物と見なしたかったのだ。「ハラキリ」の責任のとりかた、とらせかたをフランスの田舎で見、議論を聴きながら、私は遠く離れた昔の秋田の実家での、とある事件を思い出していた。

父方の祖母は小さい私をかわいがってくれた。明治二十年代の生まれの彼女は江戸時代の人間とはこうしたものか、と思わせるような人であり、北東北はほとんど縄文時代が江戸時代まで続いたようなところであるから、縄文の人を見るような観があった。私の小学校時代、彼女は六十歳前後だったが、かくしゃくとしていて私はよくこの婆さんのあとにくっついて畑や田んぼ、山の草刈りに出かけた。彼女の知恵は学校を出た母の知恵とは異質のものがあ、お喋

り好きな母の当時の教えは言葉として覚えているが、祖母の教えは言葉ではなく内容として記憶している。母は言葉で教えたが、言葉少ない祖母の教えは姿勢と態度によるものだった。

アンダースタンドという英語はドイツ語のフェルシュテエーン、ギリシャ語のエピステーメーという表現に似て、「(師の姿勢を真似して)側に立つ」という具体的身体行為にさかのぼる。フランス語のコンブランドルはラテン語のコンプレヘンデレ(手でつかみとる)という、これも身体的行為に由来している。一方、日本では「分別する、分ける」という手の行為に関わる「分かる」があるのに、「理解」という身体的具体性を想像させない漢語を使いたがる。

祖母の実家に私より少し年上のひさし(むこうでは「ひさし」と「さ」を強く発音する)という名の祖母の甥がいて、彼女はそのひさしをとても可愛がっていた。とても穏やかで優しく、行くたびに祖母を大事にし、私とは遊んでくれた。

その「ひさし」が小学校の三年になったころ、自宅の庭の梅の木に首をつって死んだ。驚愕して悲しむ祖母からすぐにははっきりとした事情はきけなかったが、後でわかったことはつぎのようなものである。

町の小学校は一つしかなかったが、戦後まもなくの小学校の音楽室には壊れかかったオルガンがあったそうだ。私はまだ小学校前だったのでそのオルガンのことは知らないが、そのたったひとつのオルガンのある日学童がよってたかって本当に壊してしまい、中の金属笛をめいめいがひとつづつ持ち去るという事件があった。ひさしは笛を持ち帰ったのではなかったそうだが、彼はそのオルガンを壊した学童の仲間だったらしい。学校の担任による本格的調べがはじまる直前に、彼は庭の低い太い梅の木に縄をかけたのであった。

まもなくこの梅の木は大伯父によって切り倒された。祖母はもともと学校というものを信用していなかったが、この事件のあとは私がいくら学校でいい成績をとっても、優等賞をもらっても反応は母とはまるで違っていた。祖母はそもそも幼稚園や学校などというものを好んでいるふうはなかった。カトリック幼稚園に三日行って喧嘩してからさぼりはじめ、近くの山や田んぼで弁当をたべて帰ってきてみたら、たちまち幼稚園から家に連絡があり、親にはこっぴどく叱られ、無理して頼み込んで入れてもらった幼稚園をやめさせられたことがあるが、祖母はそんなことには頓着せず、私に対する態度は変えなかった。

フランスのアンフィ映写場での議論を聴いて私は「ひさしの死」の話をした。旧家の末裔の彼は、学校の先生による盗みの取り調べなどという屈辱には耐えられなかったのだ、というのは残った者が言えることだろう。小学校三年になったばかりといたらまだ八歳だ。八歳で彼は何を、どう考えたのだろうか。彼はいとも自然に自死を選んだように見える。しかしこれが当時の日本の（遅れていると言われる）北東北のたてまえ、体制であった。祖母も実家の者も外では平静を保った。事件の調査はふっとんでしまった。

「自死」と「体制の論理」とに関して、この映画と「ひさしの死」とは私にとって共通している。日本では公法は私法に転覆させられ、それが新しい公法を生みだすきっかけとなるようにみえるのも共通している。大革命と破壊と殺戮をへたのちに共和国となったフランスも、ついこの間まではそうだったのでなかったか。しかし「自死」にしる「仇討ち」にしる、公論理の非人間性に対する私論理の過度の反応を、フランスも日本も今や許容できないという点では同じではないのだろうか。私はこのようなことを言ったつもりだったが一座は異様に静まり返り、皆なんだか白けた感じで帰途についた。

六十八年五月の学生の騒動は今は「五月革命」などと呼ばれることがあるが、むこうでの当時の私の友人は「五月非常事態レ・ゼヴェヌマン・ド・メ」と呼ぶ。この事態は偶発的なものではなく、直接的にはアルジェリア戦争から続く、国内での政治、社会、経済上の混乱が原因である。ド・ゴール大統領はさまざまな方策を講じて事態の打開をはかろうとした。同年七月の地方選では「カオス状態」とか「共産主義化の脅威」といった言葉で辛うじて乗り切るが、翌年、上院改革と地方改革とが国会で否決されるとド・ゴールはさっさと大統領を辞任する。六十八年はしたがって、戦後の旧体制、最後の切り札として登場していたド・ゴールの最後の努力の年である。末期とはいえ、テレビで独特の抑揚でフランス語を話すド・ゴールの風貌には超人的なカリスマ性があり、政治信条の違う人も尊敬の念を抱いていた。映像と肉声の力は偉大だ。現在のシラク大統領は彼の若い子分である。

この「五月非常事態」が勃発する前に、私は日本に、ほぼ二年ぶりに帰国した。

フランスに行く前の、オリンピックの余韻と余塵でまだ埃っぽかった東京は

夜の明るさを増し、町の風情の人の顔も妙に派手っぽくなっていた。なんだかまったく習慣の違った国に帰ったようで、道を歩くと人にぶつかりそうになり、バスにもうまく乗れずに後の人に迷惑をかけるので、あまり外に出ずに妹の家に三日ばかり文字通り蟄居したあと、秋田の家に帰って三週間ほど休養した。フランスの田舎からパリに出たときも目がくらむ感じはあったが、東京は二年たらずの間に驚くべき変容を遂げていた。

東京に戻ってしばらくぼうっとしていたが、東大安田講堂の占拠とその攻防がはじまり、その占拠者の指導者の一人が、私の大学時代の友人で私より先に帰国していた M さんであるのを知った時はひととき呆然とした。むかし、井の頭にある私の下宿を訪ねてきた時に、昼に冷やし中華を出前でとったところ、「お前はブルジョワだ」と言った男である。台所のない下宿なので、なにかを作ってだす、などということではできなかつただけの話だ。一体、私のいない間の東京で何がどう変わったのか見当をつけるのには時間がかかった。町の人々の顔は、フランスの暗いが真剣な感じとは逆に、どちらかと言えば幸福感に満ちていたように思う。プロコルハルム（フランスではプロッコラロムと言っていたので日本で探し出すのに苦労したが）の「蒼い影」とか、ビージーズの「ワールド」といったちょっとけたるい幸福感をかもしだす曲が吉祥寺の繁華街には流れていた。庄司薫の「赤ずきんちゃん」がカマトト高校生には人気だった。私が本格的に酒を飲みはじめたのはこの頃からだ。「ハラキリ」と「ひさしの死」から何世代も飛び越えていた。

しかしこの時代が妙に凶暴であったとも思うのは、もしかしたら私自身若く凶暴だったからかも知れない。三億円事件があった。私の大家さんである大学教授は、家宅搜索が簡単に許された戦前の警察なら、この事件はすぐ解決しただろうと言った。この頃から人々の顔から驚きの表情が消えてきたように思う。かけがえのない物や事態がどんどん少なくなっていき、記号化されることが可能な事態はすべて記号化されつつあった。なんでもあり、どんなものでも替えがきく。以前通った赤坂のプールは力（道山所有の）マンションのなかにあった。ある冬、力道山はやくざに刺し殺されたが、プールもマンションもそのまま残っていた。ある秋には三島由紀夫が自死し、介添人に首をはねさせた。その時は湘南に遊びにっていて車のラジオでそのニュースを聴いたのだが、はじめ、三島を三波（春夫）と勘違いするほど私はボケてしまっていた。

六十八年を分岐点として東京とパリははっきりと違う方向に走り始めていた。アメリカ（英語、文化）が双方の町にどっと入り込んだが、同質だが胡散臭いものに抵抗する歴史の「ため」がパリにはある。一方、東京はこうした「ため」が太平洋戦争で打ち砕かれ消滅していた。空襲で破壊されたのは日本の建物ばかりではないのだ。パリでは日本（文化）は翻訳では買えないとわかっているから、でかい日本文化センターとか、素晴らしいイスラム文化センターをパリの超一流の場所にたてた。

東京では「切腹」（六十二年松竹）のようなものを真剣に見る者、議論する者が激減していた。田舎では「ひさしの死」は遠い思い出となっていた。三億円事件の経過はこうした世の中の変化を微妙に象徴していたのではないかと今では思う。この明らかな犯罪は被害者というものがはっきりとイメージできなかった。おそらくなんらかの保険機構が強奪された金額を補填したのであろう（違うかもしれないが私などはそう思っていた）。手がかりとなるものを沢山残して犯人は明らかに存在したようだが奇妙なことに捕まらなかった。法は明らかに犯されていたが、被害者は顔のない法人であり、犯したものは責任を問われることなく闇に消えた。数年して捜査を黙々と続けてきた刑事が過労で死んだことが新聞の片隅に載った。そしてまもなく事件は時効となった。もはやここでは公の法を犯したものに責任を取らせることが不可能ということであったが、人々はその事態に形だけの憤りを覚えても私的な怒りを持つことは少なかった。人々はこの事件から無意識の教訓を得てしまったように思える。つまり公的倫理もその発現たる教育もなめられ始めたのだ。

祖母は公とか法とはしょせん人の作り物であることをはじめから知っていたようだが、そうではないと思ってきた者の処世のキーワードは、以後「無責任」という語になった。

知識人と呼ばれていた人種の多くはこの頃から、なだれをうって方向転換した。

（明治学院大学言語文化研究所紀要『言語文化・特集 1968』18号、2002年2月発行、に載せたもの）